

平林 和枝 先生

2018.01.09

平林和枝先生は、知る人ぞ知る「道徳授業の名人、読み物資料作りの名人」と言われた人である。（ご本人はそういう言われ方をとても嫌がっている…。）

先生は平成 21 年度に東京都港区立白金小学校教諭を最後に定年退職され、現在はご主人と共にマレーシアに在住されている。

教師になる前、先生は東京都三鷹市役所と三鷹市教育センターに勤務されていたが、その間に通信教育で教員免許を取得され、主婦で乳飲み子の母という立場から教職人生のスタートを切られた。

着任した小学校で道徳主任を命ぜられ、その縁で東京都小学校道徳教育研究会に入会し、以来ずっとこの道一筋に歩んでこられた。

道徳授業には、日頃の教育活動をはじめ、教師の人生経験のすべてが顕れる。そして、それらは一体となってその人らしい個性的な道徳授業が展開される。

先生はスクールカウンセラー研修を長きに渡って深められ、「児童理解は教育の出発点であり、ゴールである」という信念をおもちである。そのことは先生の授業の深みの大きな要素になっている。

私が玉川大学に勤務していた平成 27 年度までの 8 年間、毎年 1 度先生に通信教育のスクーリングに来ていただき、学生たちに本物の道徳授業を体験してもらっていた。講師料ではなく、全くのボランティアで来ていただいた。せめてもの謝意の表明に「反省会」と称して町田の駅前でささやかな慰労会をし、その後、新宿までロマンスカーで帰っていただくだけだったが、先生にはニコニコとご快諾いただいて本当にありがたかった。

また、先生の授業は通信教育部の学生たちへの熱いメッセージでもあった。通信教育を続ける大変さを身をもって知る先生は学生たちに「負けるな。頑張れ。夢はかなう。」と熱いエールを送ってくださった。学生たちは本当に幸せだった。

ここに紹介する先生の自作資料と道徳学習指導案は、改正学習指導要領が告示される前の学習指導要領に基づいている。したがって、内容項目の表記などは道徳科のものと異なるが、道徳授業そのものの特質は変わるものではないので読み替えるなどして理解していただきたい。

念のために言うておくが、このレベルの道徳授業ができるようになるまでに要した先生の歳月を想像してもらいたい。と同時に、不断の精進は絶対に人を裏切らないことを再確認していただきたいと思う。

道徳学習指導案

平成26年8月13日(水)

授業者 平林和枝

- 1 主題名 「より高い目標をめざして」 内容項目1-(2) 希望、勇気、不撓不屈
- 2 資料名 「宇宙をめざして」
- 3 主題設定の理由

(1) ねらいとする道徳的価値について

人はみな、よりよく生きたいと願っている。そのためには、自分自身を高める目標をもち、その実現に努力していくことが大切である。しかし、目標が高ければ高いほど、その実現は容易ではない。「これをやろう」と心に決めて始めたものの、途中で思うようにうまくできなかつたり、困難にぶつかってくじけてしまったりして、あきらめてしまうことはよくあることである。

迷い、悩み、安易な道をとろうとする人としての弱さを理解した上で、それを乗り越える強い精神力と地道な努力の大切さを一つ一つ積み重ねていくことが重要である。

自分自身の道を、自分自身で切り開いていく力を身につけていくためにも本時の価値は重要な価値であると考えます。

(2) 玉川大学通信教育部の学生の実態について (省略)

(3) 資料について

本資料は惑星探査宇宙船「のぞみ」と「はやぶさ」の事実と映画「おかえり、はやぶさ」のストーリーを合わせて平林和枝が改作したものである。(文中の名前は仮名。)

7年に及ぶはやぶさプロジェクトチームの苦闘は筆舌に尽くし難いものである。どうしてそこまで頑張れたのか、調べていくうちに、その前の火星探査宇宙船「のぞみ」の存在が浮かび上がってきた。そして、ここで頑張らなければ日本の宇宙開発の未来は無い、二度と失敗を繰り返すわけにはいかないという強い危機感が感じられた。

三十数回火星に宇宙船を打ち上げ、二十数回失敗しているアメリカやロシア(含む旧ソ連)と違い、初めての打ち上げなのに失敗は許されない雰囲気がある。それなのに、いざ打ち上げとなると、小さい船にあれもこれもと沢山積み込まれ、それも失敗の一因ではないかとも言われるくらいである。

さらに、今の宇宙ブームと違い当時は惑星探査への国民の理解も乏しい。「はやぶさ」でさえ帰還する時、マスコミの扱いは軽かった。大きく取り上げられるようになったのは、その後である。

本時では失敗に苦しむ大橋博士の葛藤を役割演技をとおして考え、ねらいにせまりたい。

(4) 関連価値の扱いについて

現実の世界で起こったことを取り上げた場合、事実に近づけば近づくほど、そこには様々な価値が混じってくる。小学生の資料は価値を絞り込み、ねらいに迫り易く再構成するが、大学生である大人の場合、それはあまりにもわざとらしくなってしまうことがある。

本時の場合、「希望、勇気、不屈」のほかに、「真理の探究」「家族愛」などが多くふくまれている。話し合いの時、それらの価値がでてくることも考慮しつつ進めていきたい。

4 本時のねらい

より高い目標をたて、希望や夢をもってくじけないで努力しようとする心情を育てる。

5 展開の概要

	学習活動と予想される学生の反応	・ 指導上の留意点 * 評価 (方法)
導入	1. 地球と火星との距離から1000Kmの意味を考え、惑星探査への興味を喚起する。	・ 資料への導入を図る。 * 本時の内容に興味・関心をもったか (発言の様子)
展開	2. 資料を視聴し、話し合う。 ① すべての職を退いて家に閉じこもる博士と息子の心情を考えよう。 <父> ・ 私は何のために火星探査に一生をかけたのか ・ 私がつれてきた男は命までかけた。私が引き抜かなければ、大学で立派な論文をかいてみとめられていただろうに。すまない！ ・ 私の失敗は「ごみ」とよばれるようなものだったのか。 <息子> ・ そんなに何もかも自分のせいにするなよ。最善をつくしたじゃないか。 ・ 分かってくれる人だって絶対にいるよ。 ・ のぞみの技術は確実にはやぶさに受け継がれる。無駄ではない ② 博士が再び講演に出向くようになったのは、どんな気持ちからか。 ・ 自分のやったことは、無駄ではなかったんだ。 ・ みんなもこんなに喜んでいて。日本の宇宙開発の未来のために、私なりに、がんばろう。 ・ 亡くなったあの男もきっと喜んでくれている。ありがとう。	・ 映像資料により、臨場感ある資料提示をする。 ・ 班を二つに分け、父親役と息子役になって、交互に役割演技をする。(できるだけ多くの人が話し合いに参加できるように、少人数のグループとする) ・ 役割交代を行う。 ・ 演技後、どんな気持ちだったかを発表する。言い合いではないので、丁寧に進めたい。 ・ 今までの経験や生き方に対する思いを入れて充分話し合える時間を確保する。 ・ はやぶさの成功によって自分が人生をかけてやってきたことの意義を再確認した博士の気持ちを押さえてから発問する。 ・ 各グループで話し合い、話し合ったことを全体に発表する。 * 話し合いに積極的に参加して、自分の思いを話していたか (発言・態度)
	3. 各グループの発表を聞き、その中に含まれている思いを感じよう。	・ 話し合いの過程を大切にしたいので、発表の形にはこだわらない。 ・ 発表を聞きながら、自己を振り返りたい。 * 自分をみつめ、真剣に聞いていたか。(態度)
終末	○この話のその後を視聴し、余韻をもって終わる。	・ 2014年・・・つまり今年の冬には、「はやぶさ」を改良した「はやぶさ2」が再び宇宙を目指す予定であることを告げ、余韻をもって終わる。 * 話を関心をもって聞いていたか。(雰囲気)

6. 本時の評価

- ・ 人生をかけてやってきたことをごみといわれ、目標を見失ってしまった博士の苦悩を理解することを通し、人間の弱さを共感的にとらえることができたか。
- ・ 不可能だと思われていることにも果敢に挑戦し、成し遂げていく人間のすばらしさと、それを支えているものについて、自己の思いを交えながら話しあうことができたか

宇宙をめざして

平林 和枝

始めて地球の重力を脱したハレー彗星探査衛星「さきがけ」から20年、日本の宇宙開発の研究は困難の連続であった。

限られた人員と予算、厳しいスケジュールと国民感情、その中で1998年7月4日、惑星探査衛星「のぞみ」は火星に向け出発した。

途中様々な困難に出会い、そのつど全力で回復に努めたが、ついに2003年12月9日、5年に及ぶそのミッションを終了した。

宇宙科学研究所の一室では、記者会見が開かれていた。

「残念ながら『のぞみ』は、火星まであと1000Kmという所まで到達しましたが、電源故障、ならびに燃料供給バルブの故障により、着陸を断念。本日、火星の周回軌道を離脱させました。」

プロジェクトリーダー大橋博士の説明に対し、記者たちからは厳しい質問が浴びせられた。

「この計画は出発前から危ぶまれていた。それを無理やり実行したのではないのですか。」

「打ち上げロケットの開発が1年延びてしまい、火星と地球との距離は遠くなっていたはず。そんな条件が悪い中、なぜ打ち上げを強行したのですか」

「途中で故障が続発し、もうだめだと思われていたのに、なおも運用を引き伸ばしていたのは、無駄ではないのですか。」

それらの質問に丁寧に答え、研究室に戻る博士の目に、文部科学大臣の記者会見のTV画面がうつった。

「このたびは100億円以上の皆様の税金が、このような形で無駄になってしまったことに対し、心よりおわび申し上げます。今後は、二度と同じあやまちを繰り返さないよう、原因究明に努めてまいります。」

「のぞみ」計画の中心人物だった博士はその後職を辞し、一切の社会とのつながりを絶った。

数年後、JAXAとなった研究所の女性職員が博士に講演を依頼に来た。

博士はきっぱり断ったが、彼女はなおも食い下がった。

「私は、学生の頃、鹿児島で先生のお話を伺いました。人間は何か目に見えない大きな力によって支えられているのだという、お言葉に感動してこの世界に入りました。子供たちにぜひ、その思いを伝えたいのです。」

しかし、博士は冷たく拒絶するのであった。

ある日、イオンエンジンの開発にたずさわっている息子が尋ねてきた。

彼の前には、心を閉ざす父の姿があった。

「僕は、はじめてJAXAにつれていってもらった時のことをおぼえているよ。あのときだったんだ、僕が宇宙に挑戦しようって決めたのは！」

博士はぼつりと言った。

「人は皆、失敗を乗り越えて、次へ進む。宇宙開発も数々の失敗を乗り越えて進歩があると、口では言うんだ。」

「27万人もの名前が寄せられたじゃないか。みんなで連日連夜、手で切り取ってアルミ板に焼き付けたじゃないか。」

「私は、赤外線宇宙学で世界最先端の論文を書く男を、大学の研究室から『のぞみ』の現場に呼んだ。彼は昼夜を問わず、全力で『のぞみ』に取り組んできた。身を粉にして働いた……。私は、彼の遺影をアルミ板に焼き付けた。一緒に火星に行かせようと思って。」

博士は振り絞るようにいった。

「だれのせいでもないよ。全力を尽くしたんだ。この失敗は必ず次に生かせるよ！」

「だれもが、そういう！しかし、これを見ろ！！」

博士は、古い新聞を出した。

そこには大きな見出しで「**のぞみ、宇宙のごみになる。**」とかかれていた。

「ごみと呼ばれた失敗に私は人生をかけたんだ。人生をかけ、人生を費やした『のぞみ』を宇宙のごみにしてしまった。人生の長い年月と一緒に生活してきた『のぞみ』を最後に火星の軌道から離脱させた時、我が子を失ったような気持ちだった。」

息子は父をにらんだ。

「たかが、機械にそこまで……。幸せ物だな『のぞみ』は。おれには、わからないね！」

父に背を向けて、息子は立ち去って行った

その頃、「はやぶさ」のプロジェクトリーダー江本博士は、打ち上げを前にメンバーに強く言った。「成功するしかない。この国は成功しか評価されないのだ。よくやった、おしかった、がんばります！は意味が無い。人の心はうつろいやすい。ひとつの失敗で形勢は大きくかわる。『はやぶさ』は惑星探査のラストチャンスだぞ。」

2003年5月9日13時29分25秒 「はやぶさ」は打ち上げられた。

JAXAに見学に来た子供たちに説明のお姉さんが言った。

「『はやぶさ』は46億年前に生まれた地球の起源を知る大事なプロジェクトなんです。惑星イトカワと地球の間は3億Km,そこを2年4ヶ月かけて行って帰ってきます。『はやぶさ』には88万人もの人の名前が書いてあるプリント版がのっています。」

イトカワに着陸して石を取って帰ってくるというのは、日本からボールを投げて、地球の反対側のブラジルのハエに当てるような難しい技術で、世界で成功した国はどこも無いんです。」

説明がここまで行った時、手があがった。「はい！」

「別に、それで生活がわるわけじゃ、ないじゃん。『はやぶさ』に使う127億円があつたら、福祉や教育に使ったほうがいいんじゃないですか。」

会場は思わずシーンと静まり返った。

2005年11月20日 イトカワに着陸

12月7日 サンプル採取の為の弾丸が不発射。大量の燃料漏れが確認。

12月8日 姿勢が乱れ、電波受信できず。行方不明となる。

江本博士は先輩の大橋博士を訪ねた。

「『はやぶさ』が行方不明です。手を尽くしましたが見つかりません。これ以上やることはありません」

大橋博士は言った。

「『着眼大局、着手小局』今、目の前のことに最善を尽くすしかない。プロジェクトのみんなの指揮を保つこと。そうしないと、すぐ他にのりかえてしまう。」

2006年1月23日 46日ぶりに電波をキャッチ。軌道から遠く離れてしまっていた。

エンジンA 停止

エンジンB 停止

エンジンC 出力60%

エンジンE 設計寿命をはるかにこえている。

メモリー機能劣化により、制御不安定

満身創痍の『はやぶさ』は戻ってこられるのだろうか・・・。

「『はやぶさ』はお金が無かったから外注にださず、みんなで作った。だから、みんながはやぶさのすみずみまで知っている。成功とは意欲を失わず、失敗につぐ失敗をすることである。今、やれるだけのことをやるしかない」

「よし、賭けよう！生き残ったエンジンどうしを繋ぐ。地上では一度も試したことの無い方法だ。ショートしたら二度と再起動しないかもしれない・・・。」

全員、祈るように画面を見つめた。

2010年6月13日 7年、60億Kmにわたる旅を終えて、はやぶさが帰ってきた。

19:51 カプセルを取り出して、地球に送る。

22:02 地球の姿を送信。(5枚のうちの最後の一枚のみ半分成功)

22:51 大気圏突入 1000度の高温で燃え尽きた。

カプセルは無事オーストラリア、ウーメラ砂漠に着地回収される。

大きな拍手の中、父に電話する息子の姿があった。

「今、言わなきゃ、一生後悔するから・・・。ありがとう、ぼくをここに連れてきてくれて。ぼくは、ずっと背中を見て、後を追ってきた。ぼくに、道を作ってくれて、ありがとう。」

父は静かに言った。

「いままで、お疲れさまでした。素晴らしい仕事だった。」

それからしばらくして、講演依頼を受け、学生を前に話をする博士の姿があった。

「人はなぜ、宇宙に惹かれるのでしょうか。なぜ宇宙を見ると心を動かされるのでしょうか。日々生きていくと、つらい、苦しい、退屈、つまらない・・・、様々な事が起きます。そんな時、空を見上げます。しかし、今、目の前に見えているものだけが全てではないのです。宇宙は、その90%が目に見えません。人間は、宇宙の一部です。そして、その見えない大きな力に支えられているからこそ、強さも賢さもあたえられているのです。」

「はやぶさ」が持ち帰った1500個の微粒子は「イトカワ」由来のものと確認された。

そして、2014年冬、「はやぶさ」を改良した「はやぶさ2」が打ち上げ予定である。

参考文献

火星探査機のぞみがのこしたもの ISAS PLANET-B

Wikipedia のぞみ (探査機)

ISAS 浩三郎の科学衛星秘話 火星探査機のぞみ その1, 2, 3

Wikipedia はやぶさ (探査機)

角川映画「おかえり、はやぶさ」